

CONTENTS

▼土木に関わる人と活動

▽つなぐ活動

- ・インフラメンテナンスの地域協働の取組み：ISS+SLIM Japan

CNCP通信

VOL.113/2023.9.5

■今月の土木■



●8月4日「橋の日」のイベント（宮崎「橋の日」実行委員会）

▽社会課題への取組み

- ・インドネシアの農村地域における村民主導型給水事業スキームを通じた給水人口率の改善：小田嶋龍飛

▼土木のはなし

▽これも土木

- ・お城における土木の話（3）：大友正晴

▼フレンズコーナー

- ・8月4日「橋の日」宮崎発祥の取組を全国に発信～「橋」への想いを、地域づくりの架け橋に～
：湯川大介

▼事務局通信



●橋橋の橋みがき ●「とんところ地震」絵本の贈呈

■8月4日「橋の日」宮崎発祥の取組を全国に発信～「橋」への想いを地域づくりの架け橋に～

8月4日（ハシ）「橋の日」は、昭和60年に宮崎県延岡市出身の湯浅利彦氏が提唱した宮崎発祥の記念日です。宮崎「橋の日」実行委員会は、昭和62年に設立し、宮崎市中心部の大動脈である国道220号の大淀川に架かる橋橋において、第1回「橋の日」イベントを開催して以来、今年、37年目を迎えることができました。本稿では、当会これまでの取組についてご紹介します。

（宮崎「橋の日」実行委員会：湯川大介）

<https://hashinohi.jp/>

▼フレンズコーナーに続く。



●今月のフレンズは、土木学会インフラパートナー団体の仲間です。



▼土木に関わる人と活動／つなぐ活動

インフラメンテナンスの地域協働の取り組み

株式会社アイ・エス・エス
NPO 法人 社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会
高野輝浩・胡谷優・山口恵子・吉岡彩佳・橋本苑佳



1. NPO 法人 SLIM Japan について

NPO 法人 社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会（通称 SLIM Japan : Society for Lifecycle Infrastructure Management）は、社会インフラに従事してきたエンジニア達が集まり 2009 年に設立した団体です。エンジニアの経験や知識を活かし、社会インフラに関する調査、研究開発および政策提言を行い、社会インフラ全体の利益の増進に寄与することを目指して活動してきました。その活動の一環として、2016 年より「インフラメンテナンス国民会議」の運営に携わり、国民会議の目的の1つである「インフラメンテナンスへの市民参画の推進」の一助になればと考え、地域住民が誰でも気軽に参加できるインフラメンテナンス活動をスタートしました。

2. 地域協働活動のきっかけと思い

SLIM Japan は、産業界（民間企業）が主体となり官公庁・学校を巻き込みながら、インフラメンテナンスの重要性を分かり易く地域住民に伝えていくことを目指しています。

土木インフラは生活には無くてはならない存在であるにも関わらず、他の様々な社会課題と比較して、老朽化に対する地域住民の危機感が希薄であると感じていました。自身の所有する自動車や住宅のように、土木インフラに愛着を持ってもらうためには、地域住民自らが清掃メンテナンス等を行いながら土木インフラに直接触れることがきっかけになるのではないかと考えました。

そこで、地域住民が気軽に、そして安全に土木インフラに触れることが可能な構造物として、横断歩道橋を対象に清掃メンテナンスを企画したことが活動の始まりです。

一般的にインフラメンテナンスというと、専門性が求められ、高度な知識や技術を持った者でなければ従事できないと思われてきましたが、メンテナンスの中でも「点検や清掃」であれば、地域住民でも比較的簡単に関わることが可能であると考えました。

3. 取り組み事例

インフラメンテナンスの地域協働の取り組みとして、3つの事例を紹介します。

①クリーンプロジェクト

クリーンプロジェクトとは、地域住民が日頃から利用している横断歩道橋を清掃メンテナンスするプロジェクトです。

本プロジェクトでは、メンテナンス清掃の前にビンゴやクイズを行い、参加者に橋やインフラメンテナンスの大切さについて楽しく学べる機会を提供しています。例えば、橋には雨水を排出するためにどのような構造が施されているのか、どのような状態だと雨水を排出できず、劣化に繋がる可能性があるのかを学んでもらい、その後、学んだことを実践してもらうための清掃メンテナンス活動に移ります。具体的には、排水溝に溜まったゴミや雑草、排水樹に堆積した土砂や落ち葉の除去を行っています。

活動中には近隣の住民から声を掛けてもらうことも多く、「綺麗にしてくれてありがとう」「次回は



クリーンプロジェクトの活動の様子

参加するので声掛けてね」と聞くと嬉しい気持ちになります。参加した子供たちのアンケート結果では、「楽しかった、またやりたい」「橋に興味をもった」「排水柵の土と葉っぱを取り除いて雨水が通るようになって良かった」などの感想を得られました。また、活動中に発見した路面舗装の損傷など歩行者にとって危険な箇所は管理者に連絡し、後日修繕された所を目の当たりにすると活動の意義を再認識します。



はしピンゴ

②自由研究講座

自由研究講座とは、小学生を対象とした、親子で協力しながら橋のペーパークラフトを製作し、メンテナンスについて学ぶ「座学+体験」を組み合わせた講座です。

座学では、土木インフラとは何か、道路や橋の必要性、橋の構造、橋上の雨水の排出方法、橋の点検やメンテナンスの重要性を学ぶ講座を開催しています。

体験では、実物の橋を見学してもらい、座学で学んだことを実際に目で見て確認することにより、橋への理解を深める機会を設けています。

その後、橋のペーパークラフトを親子で協力し組立てながら、橋の構造や部材の役割を深堀し、理解できるような取組みを行なっています。ストローで再現した排水管を取り付け、雨水が排出される仕組みなども理解してもらい、最後に完成した橋に好きな色を塗り、名前を付けてもらいます。「帰宅後、完成したペーパークラフトを見せながら部材の説明を家族にしていた」などの報告を親御さんから受けました。今回体験したことによりインフラに少しでも興味を持ちメンテナンスの大切さを感じてもらえたらと感じています。



自由研究講座の様子

③ハシ・メンテナンス

ハシ・メンテナンスは、大学生を対象として橋梁簡易点検と清掃メンテナンスを組み合わせた取組みを行なっています。「日本の橋梁とメンテナンス」と題した講義を行い、高度経済成長期に建設された供用後 50 年を超える橋梁の多さや、地域住民でも出来る橋梁簡易点検やその方法についてレクチャーしています。

また、現地で実物の道路橋や歩道橋の点検も行います。舗装タイルの剥がれ、地覆の欠損や高欄の損傷、鋼部材の塗装劣化、歩道橋階段部の滑り止めゴムの劣化損傷などを発見した際は、スマートフォンで状況撮影を行い、記録します。学生達は、その点検結果簿を作成し、管理者に提出します。

最後にメンテナンス清掃を行い、地覆の際に生えた雑草の撤去により雨水の流れを確保したり、排水柵に溜まった砂泥の撤去を行い、機能の回復を図ります。後日、点検で見つかった損傷箇所がインフラ管理者により修復されていると、活動の効果を実感します。



ハシ・メンテナンスの様子

4. おわりに

本活動は、今後も継続的に行いながら、多くの方を巻き込んでいくことが重要と考えます。クリーンプロジェクトはこれまでに5回開催し延べ 203 名、自由研究講座は 2 回開催し 27 組、ハシ・メンテナンスは 2 回開催し計 17 名の方に参加していただきました。地域住民が誰でも気軽に参加できるインフラメンテナンス協働活動は、まだ始まったばかりであり、今後も地域住民の方に橋やインフラメンテナンスに興味を持ってもらえるよう、活動を継続していきます。

また、様々な地域で同様の活動が展開されていくこと、地域住民の方々による自主的な活動へ発展することも期待しています。

▼土木に関わる人と活動／社会課題への取り組み

インドネシアの農村地域における村民主導型
給水事業スキームを通じた給水人口率の改善認定特定非営利活動法人 地球の友と歩む会／LIFE
インドネシア給水事業担当

小田嶋 龍飛



■はじめに

学生時代のインドネシア留学がきっかけで、バリ島郊外の村で給水事業を行っています。普段は日本の総合水事業会社で働きながら、仲間たちと協力すること約4年。多くの村民に水を届けることができました。そして今年、本活動は日本水大賞の国際貢献賞をいただきました。我々の「村民主導型給水事業スキーム」への挑戦、是非ご一読ください。

■地球の友と歩む会／LIFE について

我々は1986年から活動を開始し、現在は主にインドネシアのスンバ島で灌漑と農業支援を行っています。現地住民に主体的に参加してもらい、将来に繋がる支援が重要であると考えています。

■インドネシア プダワ村給水事業の概要

プダワ村はインドネシアのバリ島北部に位置する、人口約5,500人の農村です。バリ島南部はリゾート地として有名ですが、北部では行政によるインフラ整備が遅れており、プダワ村の給水には多くの問題がありました。

プダワ村には3つの水源と6つの集落がありますが、当初は各集落がバラバラに給水事業を行っていました。集落間の給水サービスの質に格差が生じていた為、村民同士のトラブルも起きていました。また、村全体の給水普及率は約25%に留まり、給水管が接続されている家庭においても、水を2～3日に1度しか使えない状況でした。結果として、村民の水浴びや洗濯などの衛生活動が制限されていました。

■活動内容について

• 村民主体の給水事業スキームの構築

給水設備に必要な資材、支援金を一方的に提供するだけでは、持続的な給水事業は実現できません。そこで、現地の水道公社（PDAM）、ウダヤナ国立大学の環境工学部を巻き込み、村民主導型の給水事業運営スキームを構築しました。

まず、村民で構成されるプダワ村水道組合を立ち上げ、『プダワ村給水事業マスタープラン』を作成し、平等な給水の礎を築きました。

また、給水事業の持続性を担保すべく、現地ステークホルダーの参加インセンティブを工夫しました（図1）。本事業への参加を通じて、ウダヤナ大学は研究活動の充実化、PDAMは少ない業務負荷で、農村における水アクセス改善目標に寄与できます。行政の支援に依存しない本スキームは、バリ島現地メディアにも取り上げていただき、インドネシア国内での認知が広がっています。

• 現地に適した給水システム整備

PDAM、ウダヤナ大学と協力し、現地に適した自然流下給水システムを整備しました。水源には、現地に自生するシュロの木皮を活用したフィルター一体型水路を導入し、水質および湧水の集水効率を改善しました。送水管は、配管シミュレーションソフトを用いて、現地に適した配管仕様、施工方法を選定し、漏水率を低減しました。現在、プダワ村中心部においては、毎日いつでも水が使えるエリアが急速に拡大しています。



図 1 村民主導型給水事業スキーム



▲水源工事実施前（左）と実施後（右）

• 平等な水道料金ルール の 制定

水道組合と協議を重ねながら、給水事業に必要な費用、項目を算出しました。その上で、村民の平均収入を考慮しながら、村全体で一律の水道料金ルールを導入しました。（一家庭当たり、平均で約 400 円／月程度）



▲水道組合とのミーティングの様子

■ 村民参加型にこだわる

給水事業に係る最終的な意思決定は、必ず村民に実施してもらいました。我々から一方的に“答え”を与えるだけでは、給水事業の持続性が薄れます。そもそも、村にとって本当に必要なモノ・コトは、現地で暮らす村民が一番分かっているはずです。我々は、サポートに徹しました。

給水事業の継続には、村民自身の理解促進も重要です。そこで、水道組合と協働し、本活動に関する説明会、SNSを通じた情報発信を村民向けに行い、『これはイケてる活動だ!』という雰囲気醸成しました。結果として、村民の積極的な参加を促すことが出来ました。

具体的な村民参加の例を挙げます。ブダワ村には『ゴトンロヨン』という慣習があります。村の生活に関わることはみんなで話し合い、みんなで作業する文化です。今回の給水工事は、全て村民自身にゴトンロヨンで行ってもらいました。『自分の手を動かして、自分の水道を通す』ことで、給水事業を自分ゴト化してもらいました。

■ ブダワ村から学んだ、水と人のつながり

工事後の水源には多くの村民が集まり、感謝の祈りを捧げていました。また、本活動をきっかけに、村民が自発的に植林に取り組み、将来の水源に想いを馳せています。日本に比べて、『水と人のつながりが深いな』という印象を持ちました。

昔は日本においても、田畑の豊作を願い、土着の水の神に祈る祭事などが各地で盛んでした。しかし、水道が当たり前になった現代の日本人にとって、水に感謝する意識は薄れているかと思います。老朽化や人手不足など多くの課題を抱えた日本の水道インフラ改善には、『私たちと水をつなぐを、どうやって取り戻すか』が重要だと、深く考えるようになりました。日本の水道の未来に関するヒントは、インドネシアの田舎の村にありそうです。



▲ 村民への給水事業説明会



▲ゴトンロヨン（村民参加）による給水工事



▲水源に祈りを捧げるブダワ村の村民

※下記サイトでも同活動を紹介しています。

<https://mizudesignjournal.com/infra/2007.html>

▼土木の話／これも土木

お城における土木の話（3）

アジア航測株式会社 事業推進本部
社会インフラマネジメント事業部

大友 正晴



今回からは、お城のパーツについてお話したいと思います。取り上げるパーツは、門というかお城の出入り口（虎口と言います）に関して、城を囲む堀・濠、濠や城を防護する石垣、などが土木としてのパーツであります。ちなみに建築としてのパーツには、櫓（隅櫓など 2 階以上の建物や、連続した多門櫓などと称した平櫓がある）、門、天守閣（天守は櫓の一種でもある）、御殿、などがあります。

■ 門について

建築物であります。城の出入り口として重要な要素なのでまずは門についてお話しておきましょう。

門は、今でも民家の出入り口に設けられていることもあり馴染みの建造物と言えます。大手門（追手門などとも書きます）という言葉が聞かれたり見られた方は多いと思います。大手門とは、城の正面玄關、正門のことを指します。逆に搦手門というのは、裏口（裏門）のことです。攻められたときに弱いという意味合いもありますね。これらは、場所によりつけられた門の言い方です。

門には、冠木門、棟門、薬医門、高麗門、櫓門などがあります。

まずは、平屋門と言われる一階のみの門です。

冠木門：2 本の門柱の上部に梁（これを冠木と呼ぶ）を架けその下に扉を設けた門。梁の上部に屋根を設けた場合もあります。今でも、一般家屋等で見られる門です。

棟門：屋根付きの門のこと。冠木門よりもがっしり造られた構造をしています。

薬医門：左右の鏡柱と鏡柱の後ろで支える控柱に屋根を設けた門。**高麗門**は、薬医門を簡略した門のことです。

次に二階建ての門です。時代や造りによって様々な言い方がありますが、ここでは城に関して呼ばれ櫓門の言い方でお話します。**櫓門**は二階建ての門の総称でもあります。

楼門：独立した二階建てで上部に屋根を持つ櫓門のことを言い、下層に屋根の無い門を指しますが、屋根のある場合は二重門と呼ばれています。ちなみにお寺の山門（三門）も楼門であります。

櫓門（渡櫓）：門の上を石垣の間を渡すように櫓が造られた形状をしておりそれを渡櫓と呼ばれますが、渡櫓は櫓との間の多門櫓を指す言葉でもあります。

■ 虎口（ここう）

虎口は、城郭や曲輪の出入り口のことです。つまり、城郭内の軍勢が出入りするところですが、攻め手からは集中して攻撃、進撃の入り口でもあります。そのため攻防の要として最も重要な場所でもあります。

攻め難く守り易いことが求められた虎口には、様々な工夫が施されました。最も基本的、原始的な形態として**平入り**と呼ばれ、構成される曲輪の真正面に設けられる虎口で、守りには弱いものです。そこで、虎口の内側に蔀（しとみ、蔀土居）、外側に芎（かざし）と呼ばれる一文字形の防壁が構築されました。これらは、**一文字虎口**と呼ばれたようです。攻め手が直線的に侵入してくるのを防ぐもので、進路を屈折させることで侵入を防ぐ手段としているのです。虎口で平入りのような形状の場合には、横から攻め手を攻撃することはできません。そこで、防御しやすいように虎口の形式も進化してきました。ここからは、進化した虎口の形式を次頁の表にまとめました。また、東日本中心に発達した馬出も虎口の一つです。大阪冬の陣で有名な**真田丸**は、大きな馬出の一つと言えます。

虎口の形式

形式	形状	例	略図
喰違虎口 食違虎口 (くいちがい ここう)	土塁や石垣を平行ではなく喰い違いにすることで、攻め手がS字やN字、Z字の進路を取らなければならず、側面からの攻撃も受け易くなります。	江戸城の喰違門跡が今でも見られます。外濠の迎賓館の近くに、紀尾井ホールから外濠通りの紀之国坂に出るところにあります。	
枅形虎口 (ますがた ここう)	虎口の枅形で囲み門・出入口を二重にすることで防御力を向上させた造りです。枅形には内側・城内川に枅形を造る内枅形と外側に造る外枅形があります。枅形は、防御に優れます。攻め手は周囲から鉄砲や横矢を射かけられるため防ぎようがないためです。	江戸城では、外桜田門、清水門、田安門などが、大阪城でも蛸石という巨石で有名な桜門などで、小田原城二の丸で復元された銅門、丸亀城、他にも近世のお城ではよく見られるはずです。 平地の狭い山城においても、枅形を構築している場合もあります。	
馬出 (うまだし)	虎口の外側前面に構築される小さな曲輪のことです。形状から、丸馬出、角馬出、不整形の馬出に分けられます。これが大きくなった馬出曲輪と呼ばれる曲輪もあります。虎口の防御としての機能を持つとともに、馬出とあるように攻撃の出発点としての機能を持つものです。	遺構は少ないようですが、五稜郭は判り易いと思います(欄外の写真参照)。その他には、静岡県にある諏訪原城(欄外写真参照)、名古屋城、篠山城などで見られるそうです。馬出は関東や東海地方に多く見られますが、西日本ではあまり見られません。	

虎口は防御のためのものですが、馬出は防御のみでなく攻撃にも有利と言われています。真田丸での攻防はその機能を大いに発揮したものとと言えます。

右の写真に五稜郭の馬出が見られます。しかし、大阪の役のころに比べ大砲の威力が格段に上がった戊辰戦争



では、機能を発揮することはありませんでした。

左の写真は、今年

で築城 450 年を迎えた諏訪原城の丸馬出です。形状がはっきりして分かりやすいですね。

次回は、堀・濠などについてお話します。

▼フレンズコーナー

8月4日「橋の日」、宮崎発祥の取組を全国に発信
～「橋」への想いを、地域づくりの架け橋に～

宮崎「橋の日」実行委員会 事務局長代理

湯川 大介



1. 8月4日「橋の日」について

8月4日（ハシ）「橋の日」は、昭和60年に宮崎県延岡市出身の湯浅利彦氏が提唱した宮崎発祥の記念日です。宮崎「橋の日」実行委員会は、昭和62年に設立し、宮崎市中心部の大動脈である国道220号の大淀川に架かる橋橋において、第1回「橋の日」イベントを開催して以来、今年、37年目を迎えることができました。（写真-1）

当会ではこれまで、毎年8月4日に記念イベントを実施するとともに、シンボルマークやテーマソング、のぼり旗の制作等による広報活動、また、「橋」に関するポスターや紙芝居、絵本の制作等による地域に根ざした活動、さらには、橋の日サミットやシンポジウム等の開催による「橋の日」活動の全国への発信など、「橋」に関する様々な取り組みを実施しており、平成27年には、「橋の日」活動が全国47都道府県まで拡大しました。



写真-1 第1回 宮崎「橋の日」イベント

ホームページ <https://hashinohi.jp/>Facebook <https://www.facebook.com/hashinohi/>You Tube <https://www.youtube.com/watch?v=6fYa6UtdPlc>

2. 「橋」への想い

私たちの生活に身近な川や谷、海、道路、鉄道などを越えて架かる橋は、日々の暮らしや産業経済活動、地域の歴史・文化などに密接な関わりを持っており、未来に受け継ぐかけがえのない財産です。そして、どの橋も、先人たちが知恵を生かし工夫を凝らしながら努力され、遺していただいた汗の結晶であることから、橋に感謝し、いつまでも大事にしたいものです。

（写真-2）

橋には、その地域の歴史を物語るロマンがあり、幼い日の懐かしい思い出があります。また、昔から「心の架け橋」、「愛の架け橋」、「橋渡し」、「石橋をたたいて渡る」など、数多く例えて使われているように、橋は、人・物・心・文化を渡し、人と人・地域と地域をつなぐなど、まさに架け橋となり、私たちに大きな恩恵を与えてくれます。このようなことから、宮崎「橋の日」実行委員会では、日頃、何気なく利用している橋とのふれあいを通して、橋の役割を再認識するとともに、道路・河川の愛護や浄化への意識を高め、ひいては郷土愛を深めるために、8月4日に記念イベントを実施しています。



写真-2 橋への感謝を込めた献花

3. 8月4日当日のこれまでのイベント

平成6年には日本記念日協会から、念願であった8月4日「橋の日」の認定を受け、この頃より行政や民間企業等から様々な支援が受けられるようになりました。

8月4日の記念イベントにおいては、橋への感謝の気持ちを込めた献花や清掃活動を実施するとともに、参加する子どもからお年寄りまでみんなが楽しめるよう、吹奏楽部や合唱団等によるコンサートや、魚やうなぎの放流、打ち水大作戦、橋みがきなど、工夫を凝らした様々なイベントを実施してきました。

(写真-3、4)



写真-3 魚の放流



写真-4 橋を涼しく、打ち水大作戦

4. 地域に根ざした活動として

活動10年目を迎えた頃から、8月4日の記念イベントだけでなく、地域に根ざした活動に力点を置くようになり、宮崎「橋の日」の実施会場である橘橋の歴史を調べていくうちに、福島邦成氏（私財を投じて「初代橘橋」を架橋した医師）の存在を抜きにして地域を語れないことを再認識しました。これを機会に、「福島邦成と橘橋」と題した紙芝居を制作し、現在も宮崎市内で上演会を続けています。(写真-5)



写真-5 紙芝居の上映会

また、平成13年には、宮崎県内に現存する94橋の石橋をまとめたポスターを制作したところ、各業界の広報誌に紹介され、テレビ番組で特集が組まれるなど大きな反響があり、このポスターをきっかけに、県内で合計389橋の石橋が現存することが明らかになりました。

さらに、平成15年には、県民から応募いただいた県内の魅力ある橋、総数303橋の中から101の橋を選定した上で、「宮崎の橋101選」ポスターを制作しました。この制作を通して、改めて地域を知り、愛するきっかけとなりました。(写真-6)

その他、平成26年には、寛文2年(1662年)に発生し宮崎県に大きな地震と津波による甚大な被害をもたらした日向灘大地震(とんとところ地震)を題材に、県民の防災意識向上のための取り組みに活用していただくよう、紙芝居とDVDを制作し、県に寄贈しました。

このとんとところ地震については、発生後50年ごとに地震・津波供養碑がこれまで7基建立されており、地域住民による供養祭及び供養碑建立が350年以上にわたり今日まで受け継がれています。このような地域の取り組みが、当会の活動と通じるものがあると考えています。



写真-6 「宮崎の橋101選」ポスター

5. 「橋の日」活動の全国発信

活動 20 周年を迎えた平成 18 年、全国発信の機会として以前から構想を練っていた「橋の日サミット in みやざき 2006」を宮崎市で開催しました。メインイベントの「橋の日」パネルトークでは、パネリストとして、ほくりく橋の日実行委員会、東京橋の日実行委員会、奈良県十津川村役場、鹿児島橋の日推進協議会からお越しいただき、「橋から見る地域づくりとロマン」をテーマに、熱く語っていただきました。(写真-7) その後、活動 25 周年の平成 23 年、活動 30 周年の平成 28 年には、「『橋』を通じた地域づくりシンポジウム」を宮崎市で開催し、県外の専門家による基調講演や県内外の団体による事例発表等を行いました。(写真-8)

このような全国に広げる活動が実を結び、平成 27 年には、宮崎で生まれ育った「橋の日」活動が、全国 47 都道府県まで拡大し、同年、当会は日本記念日協会より「記念日文化功労賞」を受賞しました。(写真-9)



写真-7 橋の日サミット



写真-8 シンポジウム

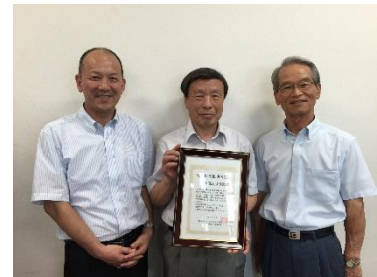


写真-9 記念日文化功労賞

6. 「橋の日」の新たな取組

平成 29 年からは、橋に感謝するだけでなく、市民目線で橋を含めた道路施設のメンテナンスにも興味を持っていただけるよう、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所の御協力により、「橋の日」当日に、橋橋見学会と「道路老朽化対策」パネル展を開催しており、参加した小学生は、「すごい！コンクリートを叩くと、いろんな場所で音が違う！」と興味津々でした。(写真-10、11)

また、令和 4 年 3 月には、公益社団法人土木学会の「インフラパートナー制度」において、土木学会と連携・協力して、インフラ関連の活動の活性化、また、地域のインフラの質的向上を図る団体「インフラパートナー」として、宮崎県内の団体で初めて認定されました。(写真-12)



写真-10 橋橋の見学会



写真-11 「道路老朽化対策」パネル展

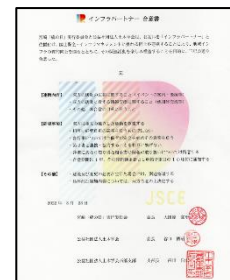


写真-12 合意書

7. おわりに

慌ただしく、ただ繰り返す日常の中では、そこに「橋」があることに気づいていない人も多いのではないかと思います。本当に大切なものは、目に見えないものなのかもしれません。人はみんな、気づかないうちに誰かに支えられて生きていますが、「橋」も、私たちを支えてくれている、そういう気持ちにさせてくれるところに、「橋」の魅力を感じています。

8月4日「橋の日」記念日が、地域づくりの心の架け橋になるように、これからも宮崎発祥の取り組みを全国に発信し、広げていきたいです。

CNCPは、
あなたが参加し、
楽しく議論し、
活動する場です！

お問い合わせは下記まで

特定非営利活動法人
シビルNPO
連携プラット
フォーム

●登録事務所
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町
3丁目13番地7
名古屋ビル本館2階
コム・ブレイン内
●連絡事務所
〒110-0004
東京都台東区下谷
1丁目11番15号
ソレイユ入谷9F

事務局長 田中努：
cncp.office@gmail.com
ホームページ URL：
<https://npo-cncp.org/>



▼事務局通信

■8月の実績

●第112回経営会議

開催日・場所：8月8日（火）Zoom会議

議題：理事会の報告と計画の確認／各事業の進捗よくと予定

●令和5年度第1回理事会

開催日・場所：8月22日（火）Zoom会議

議題：R4年度事業報告／R4年度決算報告／R5年度活動計画／定款変更／役員の退任と選任

■9月の予定

●第113回経営会議

開催日・場所：9月12日（火）Zoom会議

議題：総会の確認／各事業の進捗よくと予定

■10月の予定

●令和5年度通常総会

開催日・場所：10月3日（火）土木学会講堂

■現在の会員と仲間の数

●会員：賛助会員30／法人正会員11／個人正会員26
／合計67

●仲間：サポーター107／フレンズ116／土木と市民
社会をつなぐフォーラム15／インフラパートナー18
／合計256

●CNCPの活動には下記の賛助会員の皆さまのご支援をいただいています（50音順・株式会社等省略）。

アイ・エス・エス／アイセイ／安藤・間／エイト日本技術開発
／エヌシーイー／奥村組／オリエンタルコンサルタンツ／ガイ
アート／熊谷組／建設技術研究所／五洋建設／佐藤工業／シン
ワ技研コンサルタント／スバル興業／セリオス／第一復建／竹
中土木／鉄建建設／東亜建設工業／東急建設／ドーコン／飛島
建設／土木学会／西松建設／日本工営／パシフィックコンサル
タンツ／フジタ／復建エンジニアリング／復建調査設計／前田
建設工業（以上30社）



土木と市民社会を
つなぐフォーラム



インフラパートナー
JSCE 土木学会